

# 平成28年度 自己評価表【最終評価】

鳥取県立米子西高等学校

本校の学校方針	質の高い授業と親身な指導を通して、進路実現に必要な学力をつけるとともに、地域社会の多様なニーズに応え、郷土に貢献する「知、徳、体、志」のバランスのとれた人材を育成する。
指導重点目標	①自己実現を可能にする学力の向上 ②基本的な生活習慣と社会的規範意識の確立 ③安心且つ切磋琢磨できる人間関係の構築 ④保護者・地域と連携した活気ある学校づくり

重点目標	評価項目	評価の具体的項目	年 度 当 初			最終評価		
			現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
①自己実現を可能にする学力の向上	高い志の育成	○目的意識と学ぶ意欲の向上	○進路目標が明確でなく、学習に対する意欲に欠けている生徒がいる ○自らの可能性を低く評価してしまい、チャレンジする姿勢に欠ける傾向がある	○学問に対する興味や意欲を高め、主体的に学ぶ姿勢を身につける	・キャリア教育・総合的な学習の時間を進める部署を設け、そこを中心に企画・運営・実施を図る ・読書活動・体験活動を充実させるよう関係機関との連携を図る	・進路部内に担当部署を設け、主査・副査の分担で総合的な学習の時間の運営に当たることができた ・体験的な活動として、2年生に夏季休業中に地域イベントへの参加を勧め、多数の生徒が参加した。また、県が主催するボランティア体験事業にも参加を図り、連携できた ・読書活動では今年度も1・2年生でビブリオバトルを実施し、学年団・図書部と連携しながらコミュニケーション能力の育成を図った	B	・主査・副査による事業運営はどちらか一方が出張・休暇等でいない場合でも機能しており、今後も続ける ・今年度の総合的な学習の時間の内容変更は2年生の「みらいチャレンジ活動」による探究的な学習が中心だった。来年度は1年生・3年生の改善に向けて学年主任との連携を図る ・ビブリオバトルを継続するとともに、総合的な学習の時間の調査・探究的な活動と関連付けて読書活動を推進する
		○自ら課題を見つけその解決に向けて積極的に行動する態度の育成	○目標達成に向けてチャレンジする態度・能力を育成する	・2年生の「みらいチャレンジ活動」を活用し探究的な態度を育てる ・1年生、3年生においても「みらいチャレンジ活動」に接続する取り組みを構築する	・2年生のみらいチャレンジ活動を通じて、調査・研究した成果を発表することができた ・職員からは、課題・改善点（全体が秀逸な発表を聞く事ができていない、地域への還元ができていないなど）の指摘は多いものの、目標とする力（自立する力・主体的に取り組む意欲）を付けられる活動であるとの評価を得ている ・1年生における活動は2年生への準備段階として完成しつつあるが、3年における活動は、まともとして改善の余地がある	B	・2年生における活動の改善が急務であり、改善を促す意味でも職員に対するアンケートや生徒同士の評価アンケートの結果を踏まえ、来年度に繋がるカリキュラム開発につなげる ・2年生における活動の改善に伴い、1年生での準備段階を充実させる。特に、話し合い活動を活発にするため、1年生でコミュニケーショントレーニングを来年度は取り入れる ・「みらいチャレンジ活動」は、来年度は外部施設を使用して発表会を行い、保護者・地域にも公開する	
質の高い授業の実践	○教員の授業力の向上を図り、生徒が主体的に参加する授業の創造	○生徒の授業への姿勢が受動的である ○授業改善に対する教員の意識に変化の兆しが見られる ○生徒個々に応じた進路実現に資する授業レベルの一層の確保が必要である	○アンケートにおける生徒の達成感に関する肯定的な回答が70%以上を目指す ○アンケートにおける教師の指導力に関する肯定的な回答が80%以上を目指す	・アクティブラーニングの職員研修の機会を設け、学校としての導入を推進しめる ・総合的な学習の時間の新たな活動も利用しながら、生徒の能動的な学習態度の育成を図る ・学習科学セミナー参加者、エキスパート教員を中心に研究授業の実施に努める ・ICTを活用した授業等を進める	・学校評価アンケートの結果、「自分の学力が向上している」と答えた生徒が、1年生で44%、2年生で48%、3年生で58%であり、目標に届かなかった ・学校評価アンケートの結果、「先生が質の高い授業をしている」と答えた生徒が、全体で50数%であった ・「みらいチャレンジ活動」やアクティブラーニング型授業により徐々にではあるが生徒の能動的な学習態度が育ちつつある ・エキスパート教員や各種研究授業を中心にICTを活用した授業が増えてきた	C	・来年度は全教科、全教員でアクティブラーニングに取り組み、一層の授業力向上を図る ・「みらいチャレンジ活動」と各教科でのアクティブラーニング型授業により、生徒の一層の能動的な授業態度を育成する ・iPadを中心としたICTの活用をさらに広げる	
		○習熟度別クラス編成、習熟度別授業のより効果的な展開	○生徒の学力の分析を行い、分かる授業を展開する	・予備校や先進校での研修を通じてより効果的な教育課程、授業内容を検討する ・習熟度に合わせた教材・授業内容・評価を検討をさらに進める	・先進校視察により今後の教育活動の改善につなげた ・生徒の習熟の度合いに合うように、習熟度別クラスごとに定期考査の問題を一部異なるものにした ・評価においては教科内の連携を密にし、適正な評価ができた	B	・来年度以降も学校課題に対応した先進校視察を通じて、本校に利用・導入できるものは積極的に取り入れていく ・今後も、生徒の習熟の度合いに合った授業・考査・評価を工夫する	
学習習慣の確立	○高校での学習方法の理解と必要とされる家庭学習時間の確保	○自分から進んで学習する態度が十分に備わっているとはいえない ○予習・復習をしている生徒もいるが、効果的な学習方法がわからない生徒もいる ○進路実現に向けた学習意欲の向上が必要である	○家庭学習時間調査で次の目標を達成する 平日： 1・2年生2時間以上、3年生3時間以上 休日： 1・2年生4時間以上、3年生5時間以上 ○オリエンテーションを通しての学習習慣の確立と学習方法の理解を図る	・週末課題等を通して家庭学習の習慣を身につけさせる ・毎日、家庭学習時間調査をすることによって、家庭学習の定着を図る ・入学時の初期指導（国数英の学習の仕方の一斉指導）の一層の充実を図る ・学習と部活動の「切り替え」と「集中」を図る	・期限内に課題を提出できなかった生徒に対しては、放課後学校で課題をさせるなど週末や長期休業中の課題の提出を徹底できた。一方、課題に追われてその内容が薄くなったたり体調を崩す生徒もいた ・各学年とも目標とする家庭学習時間には、20～30分程度届かなかった ・2・3年生は引き続き毎日家庭学習時間調査を実施したことで、家庭学習時間の定着ができた。また、学年推移を見ても減少はしていない ・各階の電子ボードや黒板を利用して意識の啓発を図った ・1年の初期指導は、各教科パワーポイントを利用することにより内容が充実した	B	・課題の内容や量を精査しながら学力および学習意欲の一層の向上につながる課題に取り組ませる ・進路講演会や個人面談等を通じて、日々の学習の大切さを生徒に理解させ、継続的に指導を行う ・生徒の能動的な学習につながるよう初期指導の充実および日常の継続的な指導を行う ・1年生の初期指導は今年度の取り組みを基にし、一層の充実を図る	
		○休日や長期休業における学習の充実	○自ら進んで学習する機会を活用する生徒を増やす	・夏季学習会の内容の見直しを行い、家庭学習の増加に繋がるようにする。 ・冬期講習の上位者向け講座は1年生で参加者を増やすように呼びかけ、能動的な学習態度を身につけさせる ・講習・学習会も利用しながら模試の事後指導ともリンクさせ、レベルの高い問題に挑戦させる方策を考える	・夏季学習会はインターハイの時期とも重なったため1・2年生の参加は減少したが、3年は増加した。また、学習意欲が継続するように指導できた ・冬期講習の上位者向け講座は昨年度より1年生の生参加者は増加したが、2年生は参加者は減少した ・模試の事後指導については全員にデジタルサービス利用を義務づけた。さらに、「本格的に復習するには解説冊子利用」と進路だよりに記載し、意識を高めるよう促した	C	・来年度の夏季学習会では、事前に生徒に計画をきちんと立てさせ、より明確な意識をもって学習会に当たれるようにしていく ・部活動との両立の一助になるよう各部活動との連携を図る ・模試の復習について細かい手順を指導しなければならぬ状況が見られる。デジタルサービスのより有効的な活用方法や指導方法について学力向上委員会等で検討する	
国公立大学に合格できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○主体的に進路を選択できる能力の育成と戦略的な進路指導組織の確立	○進路実現のために自主的に学習に取り組める生徒は少ない ○入学時点での学力差が広がり、進路意識の多様化が進む傾向にある ○組織的・系統的な進路指導が不十分である	○自立的な進路設計とその実現ができる生徒が増加する ○進路指導部を中心とした進路指導組織の確立する	・キャリア教育講演会と進路講演会のそれぞれの目的を明確化し、有効に結び付ける ・進路講演会の時期・内容を3年間を見通した視点で精査・計画して行く ・3年生進路調整会の各回の目的を明確にし、それに応じて内容を絞ること、生徒一人一人にとってより有益となる会議にする ・引き続き先進校視察、教員による大学訪問を実施し、進路指導に有効な情報の収集・蓄積を図り、生徒への指導に活かす	・キャリア教育講演会は総合的な学習の時間に位置づけ、講演を通じて育成したい力を明確化した ・進路講演会はホームルーム活動に位置づけ、受験学力の向上に焦点を当てた内容にし、担任の指導に役立てた ・新規に2年生の進路講演会を設けた。内容は良かったが、設備や実施方法・時期を検討する必要がある ・7月の進路調整会は、国公立大学推薦・AO入試に照準を絞った会議にし、保護者懇談での進路相談が盛り込まれた。しかし、10・12月の進路調整会は照準が絞られなかった	B	・目標が達成されている部分は来年度の重点目標からははずして、力点を達成状況が不十分な部分に移す ・来年度から3年生の進路講演会は予備校から講師を招いて実施する等内容を変更する ・10月と12月の進路調整会のあり方について3学年団の意見を踏まえて、個人懇談や三者懇談で志望校決定の具体的な資料が提供できるようにする	
		○模試結果の利用とセンター試験を意識した指導	○1月進研模試で偏差値50以上の生徒数が1年生で160人以上、2年生で140以上を目指す ○国公立大学の現役合格者60人を目指す	・担任・教科担任からの指導だけでなく、模試分析を基に進路だよりを発行し、模試・受験への取り組み方を啓発していく ・英語の4技能を伸ばす方策を研究授業、研修等を利用して追及する ・校外模試、GTECについては来年度も目標設定を行い、委員会で目標達成の方策を検討する	・11月の校外模試の受験前後に「進路だより」を発行し、1・2年生にそれぞれ必要だと思われる情報を盛り込んだ ・1・2年生の校外模試の結果について分析シートを作成し、各教科で模試分析ができた ・1月進研記述模試で偏差値50以上の生徒が1年生で120人、2年生の国数英総合で91人、5教科文系で71人、5教科理系で16人であった。 ・国公立大学の現役合格者数は、2月10日現在21名である。	C	・1・2年生の予備登録・本登録の時期や3年生の総体後など、回数は少なくとも進路を考えるべき時期に「進路だより」を通じて必要な情報を発信し、意識を高めさせる ・来年度も模試等で数値目標を設定し、その実現に向けて委員会で検討を行う ・今年度実施した模試分析を活用し、授業内容の改善と課題の工夫に繋げる	

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）

重点 目標	年 度 当 初				最終評価			
	評価項目	評価の具体的項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方法
②基本的生 活習慣と社 会的規範意 識の確立	基本的生活 習慣の確立	○健全な心身の育成	○懲戒の対象となるような問 題行動はほとんどない ○遅刻する生徒が激減した	○年間の問題行動発生件数0を目指す	・朝の立ち番指導、服装指導、交通指導等現在の指導方針を維持して、継 続して指導を行う	・7月以降、若干の問題行動があり指導を行った。 ・学年集会等を通して繰り返し注意喚起を行ってきたが、2・3年 生に気持ちの緩みが出てきたようである ・昨年の指導件数が1件だったのに比べればやや増加しているが、 生徒全体としては概ね落ち着いた学校生活であった	B	・2・3年生への働きかけを強化し、学年集会、終業式等で強 く注意喚起する ・教室掲示用の「生徒部からの注意」を学期ごとに作成し、問 題行動の発生防止に努める
		○学力向上につながる生活リ ズムの確立		○さらに年間遅刻者数の前年比10%減を目指す	・朝の立ち番指導、服装指導、交通指導等現在の指導方針を維持して、継 続して指導を行う	・服装については稀にスカート丈がやや短い生徒があり注意を行っ たが、概ね良好であった ・遅刻は昨年よりやや増加したが、時間を守ろうとする意識は育っ ているように感じられる		B
	社会的規範 意識の育成	○社会の一員としての自覚の 喚起	○自転車マナーの悪さに関す る苦情は少ないが、並進や右 側通行をする生徒が見られる ○T.E.A.Sの活動について は、ゴミの排出量、電力使用 量、水道使用量とも現在のと ころ今年度の取り組み目標を ほぼ達成できている	○地域からの信頼が向上する ○環境を意識した生活を送る	・交通安全週間の通学指導をより徹底するとともに、クラスや校内に自 転車運転の危険性を訴える掲示物を増やす ・生徒会と協力して、生徒の立場から自転車運転マナーの向上を呼びかけ る取り組みを行う ・TEASに関しては、今年度の目標を達成する努力を継続していくとと もに、生徒の環境意識を高める取り組みをしていく	・自転車での通学指導については街頭指導を強化し、自転車での通 学停止を含めた強い指導を行った ・自転車の運転マナーはやや改善し、近隣住民からの苦情も減りつ つある	B	・入院を伴うような自転車通学時の事故も発生しており、自転 車通学者への指導を強化する ・街頭指導の回数を増やすとともに、安全運転教室等の開催も 検討する
③安心且つ 切磋琢磨で きる人間関 係の構築	健全な高校 生活の充実 できる人間 関係の構築	○部活と学習の両立ができる 生徒の育成	○定期考査前の部活禁止期間 も以前より徹底できるよう はなってきた ○部室の一齐清掃や部室の鍵 の管理など部長・マネー ジャー会議が機能している ○生徒会活動全般において、 生徒会執行部が主体的に活動 している	○部活動と学習の切り替えがきちんとできる	・定期考査1週間前の部活禁止期間に大会前で練習を行う場合の手続きに ついての連絡を徹底し、部活と学習の両立を図ろうとする意識の一層の向 上を図る	・定期考査1週間前の部活禁止期間の部室の鍵の管理について、今 年度中盤より部室の鍵ボックスを原則施錠し、大会前等の理由で活 動の申請が出ている部のみ鍵を渡すように運用を変更した ・定期考査前の部活動のルールについては概ね守られていた	B	・来年度以降も引き続き定期考査前の部室の鍵の受け渡しにつ いては、活動申請を確認したうえで行うようにする
		○部活動・生徒会活動の活性 化		○部長や生徒会執行部を中心とした活動ができる	・生徒会執行部の主体性を最大限尊重し、学校行事を生徒が主体的にかか わる充実したものにする ・部長・マネージャー会議を通じて、諸規則の徹底や部室一齐清掃等、生 徒自らが管理できるように指導する	・学校祭をはじめとする学校行事、代議員会、部長・マネージャー 会議等の諸会議を全て執行部の生徒たちが自主的に運営するよう になった ・担当教員は、行事や会議の詳細についての確認や、生徒ではでき ない校内での日程の調整と教職員への連絡等を行った		A
望ましい人 間関係の構 築	○自己の個性の理解と他者の 個性の尊重 ○自尊感情の育成	○コミュニケーションが苦手 な生徒や不適応の生徒の増加 傾向に対し、定期ケース会 議、学年別情報交換会、1・2 年生についてはQ.U結果検 討会を行っている ○教科情報（1年次）を中心 に情報リテラシーを指導し ているが、SNS等でトラブルが おこることがある ○社会貢献活動に学校全体と して参加できていない	○自分を含め一人ひとりが大切な存在と認識できる ○良好な人間関係およびコミュニケーションができる	・学年別情報交換会の実施時期の検討を含めた連携方法の一層の工夫を行 う ・SNS等も含めた情報リテラシー教育の一層の充実を図る	・教育相談担当の学年会への参加により、生徒情報の収集がしやす くなった ・定期ケース会議を月に1度のペースで行い有効であった ・合格者登校日に情報リテラシーに関する講演会を行った	A	・学期毎の職員会議において生徒の状況報告を行い、職員間の 情報共有をさらに深める ・情報リテラシーに関する講演会は、生徒・保護者が同じ内容 の話を聞くことができる数少ない機会であり、来年度の入学予 定者に対しても継続する ・教科「情報」だけでなく、i P a dを用いた授業においても 情報リテラシーについて積極的に取り上げる	
		○社会貢献活動への積極的な 参加		○各種ボランティアへの参加者が増加する	・総合的な学習の時間にも運動させながら、ボランティアへの参加を一層 進める ・地域での清掃活動等、学校全体で取り組む社会貢献活動を年間計画に位 置付ける		・ボランティアに参加する生徒が増えつつある ・J R Cと生徒会が共同で被災地に向けた募金活動を計画した ・地域での清掃活動について今年度から清掃範囲を広げ、コンベン ションセンター付近までの清掃活動を行った	C
④保護者・ 地域と連携 した活力あ る学校づく り	学校教育活 動の積極的 な公開	○PTA活動の一層の充実 ○学校と保護者の連帯の強化	○PTA大学訪問研修や交通安 全街頭指導にも保護者の積極 的な参加がある ○ホームページを利用しての 情報発信もタイムリーに行っ ている	○PTA活動への参加者が増加する ○学校の取組を理解する保護者が増加する	・ホームページ、PTA広報紙で生徒の活動内容を広く保護者に伝えること で、PTAの取組を魅力的に発信する ・学校アンケートの内容を見直し、より結果が有効活用できるようにする	・PTA広報紙での発信は概ねできた ・ホームページの発信も積極的にできたが、緊急連絡対応において 適切に対処できない点があった ・PTA活動の参加者は概ね例年並みであったが、PTA総会の参加者は 若干増加した	C	・緊急時は、ホームページでもタイムリーな情報発信を行う ・教育活動の発信についても、担当者が校務委員会で確認する ・公開授業や「翠燦く」等の公開できる行事に関しては、地域 の小中学校等にも案内を行う
		○公開授業や人権公開LHRの 充実		○保護者、関係機関、地域からの参加者の増加する	・保護者への案内文書やPTA広報紙での発信に加え、ホームページの更な る活用や地域への発信も行う ・案内を出す関係機関を拡げる方向で見直す	・講演会、公開LHRは学年毎に講師選定し、講演内容が生徒の心に 深く響くことに重点を置き実施した		B
地域や関係 機関との連 携を深める こと	○中高連携事業の一層の充実 ○文化部総合芸術祭「翠燦 く」の一層の充実	○芸術科を中心とした中高連 携事業は年々参加者が増加 し、内容も充実したものとな っている ○高大連携は不十分である	○各取組への参加者、来場者が増加する	・中学校との連携を図り、内容について早めに検討を行う ・文化部総合芸術祭「翠燦く」は10回目の節目でもあり、一層の内容の 充実を図る	・中高連携事業は大幅に参加者が増え、定着の兆しが見えてきた ・「翠燦く」は10回目を迎え、過去の取り組みを集約する企画等 内容充実を図り準備中である	B	・中高連携事業の参加者が増えるような内容について中学校と 連携し検討する ・「翠燦く」は、今年度は学校行事として学校全体での取り組 みであり、多面的な感想を取りまとめ今後に生かすよう検討す る	
		○高大連携の強化と生徒の変 容		○各大学訪問の参加者の予定人数が確保できる ○アドバイザーの指導により「みらいチャレンジ活動」の改 善ができる	・キャンパス訪問は積極的に全学年から希望者を募る ・個人的にオープンキャンパスに参加させるように積極的に情報を生徒に 提供する ・「みらいチャレンジ活動」に島根大学よりアドバイザーを招聘し、より 充実した活動となるように改善する		・今年度から大学訪問を希望者として募り、鳥取大学・島根大学・ 鳥取環境大学で募集したが、環境大学は定員に達せず派遣をあきら めた ・鳥取大学および島根大学には合計75名の参加者があった ・「みらいチャレンジ活動」では職員への意識啓発、生徒自身の活 動の評価を行い、来年度への改善点を明確に示すことができた	B

評価基準 A：十分達成（100%） B：概ね達成（80%程度） C：変化の兆し（60%程度） D：まだ不十分（40%程度） E：目標・方策の見直し（30%以下）